



房総プラントが開発したアルミ製の鳥獣捕獲用檻（右）と搬送箱＝白子町

房総プラントが開発したアルミ製の鳥獣捕獲用檻（右）と搬送箱＝白子町  
既に茂原市、長南町などに納入している。  
INORIはナットで締めているだけなので、工具なしでできる。それがアルミの長所」と説明する。

INORIはナットで締められるが、6分割できるため1人でも扱える。設計担当の斎藤章夫さんは「鉄体組み立てが難しくなる。INORIはナットで締められ、協力して試行錯誤し作り上げた。

檻は高さ1㍍、奥行き1㍍80㌢。鳥獣が餌にひかれ中に入り、ひもに掛かると扉が落ちる。重さは100㌔あるが、6分割できるため1人でも扱える。設計担当の斎藤章夫さんは「鉄

だと3~7年でさびて解体、組み立てが難しくなる。

INORIはナットで締められ、協力して試行錯誤し作り上げた。

白子町の金属加工業「房総プラント」（篠崎武尚社長）がアルミニウム製の鳥獣捕獲檻（おり）「INOORI（猪檻）」を開発した。イノシシ、シカなど有害鳥獣対策と、ジビエ料理普及に応えるための新商品。従来の鉄製に比べ、解体が簡単で持ち運びが楽なのと、サビが出ず長持ちするのが特長。既に茂原市、長南町などに納入している。

## 白子の「房総プラント」開発

# アルミ製 鳥獣捕獲檻 移動、解体 楽で長持ち

社のポリシーを熱く語った。

同社はアルミ部門に力を入れていて、溶接技術の高さを誇る。業務用の脚立のほか、プロ野球のバッティンケージ、東京パラリンピックで使用されたゴールボールのゴールなどを手掛けている。

鳥獣捕獲檻の開発は昨年、警備会社 ALSO-Kが茂原市にジビエ加工場を開業したのがきっかけ。イノシシ、シカを生きたまま捕獲、運搬するための檻を求

められ、協力して試行錯誤し作り上げた。価格は1台25万円を設定。鳥獣被害に悩む自治体や個人の需要を見込んだ。同社は今後、生活用アルミニウム製品を「房総House」ブランドで開発、販売する計画で、篠崎社長は「いい物を作つて納めれば、客はまた注文してくれる」と自